

## 第 20 号(2010. 1.25 配信)

2010 年を迎えました。今年も元氣でご活躍ください。皆様のご多幸、ご発展を祈ります。

今日の話は「今年の年賀状から」。

今年もたくさんの年賀状を頂戴しました。私の発信数は、JICA 現役の頃に比べるとかなり減っていますが、それでも 300 枚を上回りました。届いた枚数は、まだ確かめてはいませんが(その事情は末尾に書きます)、発信数とほぼ同数に近い賀状を拝受しているはずです。一番多いのは、明らかに JICA の関係者から。中でも協力隊員の OB・OG 諸兄姉が最多ですが、専門家や JICA 職員の、今も現役や OB の方々からも多数頂きました。

JICA 本部現役の S さんは、アフリカから帰国し小波乱はあったが、今度の「事業仕分けで激痛が走った」、「これをチャンスに改革を進めたい」と。

マレーシア隊員 OB の A さんは、毎年、賀状で、現地での社会福祉関連の交流活動を細かにレポートしてくれます。その葉書レポートが、初めて年末に届きました。正月は海外で活動の予定で、ご挨拶を早めに繰り上げたようです。一方、ラオス隊員 OB の T さんは、この数年、奥さんと一緒に、かつての任地に住み込んで社会的活動中でしたが、現地で描いた絵入りのレポート賀状を、徐々に郷土から送ってくれました。

いずれもほんの一例です。専門家だった友人たちもそれぞれ、再任地や海外出張、あるいは日本での活動状況を、本文、添え書きなどで紹介し、JICA 情報、海外情報の一助にもなっています。

さて、見方を変えて文面を見ると、今年は「寅」年だけあって、各種各様のトラの絵を拝見しました。十二支の中では描きやすく、あるいは描きたくなる対象かもしれません。こうトラづくしだと、1 枚ずつ比較してみたくなります。例年通り、息子と娘の一家が年始に来た機会に、元日と 2 日に届いた賀状の「トラ・コンクール」めいた雰囲気になりました。(十二支では「寅」、動物の漢字は「虎」。一般的にはカタカナで「トラ」。面倒ですが適宜使い分けます)

狩野探幽筆の名画など賀状に印刷されたトラは別にして、自作自画のトラだけを拾ってみました。ひらがなの「と」と「ら」を外枠にして描いたユーモラスなトラの顔の画、賀状の半ば以上を占めて一部はみ出したような、彫って刷った猛気溢れるトラは、努力賞以上の出来と評価しました。

何といっても、これが「大賞」!と決まったのは、賀状ほぼいっぱい、私の友人の奥さんご自身がトラに跨がっている写真。かつて私が横浜で仕事した当時の同業者の夫人で、鉄製の檻に座っている大きいトラの背に、にこやかに跨がっているのです。私の細君(太めでも「細君」。「妻君」は誤字)は「剥製じゃないかしら?」。娘たちは「合成写真に間違いはない。最近では技術が進んでいるから」といいながらも大笑い。

しかし私は、彼女はいつも元気が良い、写真は桂林で撮ったらしい、檻の外側に小さく「桂林動物影」と未完の 5 文字が読み取れる、賀状の添え書き本文の「虎に跨がることはめったに出来ないのでは、年賀状にしてみました」に着目。総合判断して、本物の生きたトラに跨がったのではないか? 中国人はそのくらいの商才があるぞ。

私も桂林には息子たちと個人旅行で行きました。「桂林の風景は天下一」とたたえられる風光明媚な街で、中国の「桂」はキンモクセイですから親しみも湧きました。「漓江下り」の船旅は良い思い出です。「だけど動物園はなかったよな」と自分に問い掛けながら、翌日、彼女に電話してみました。直接話を聞いてみると...

何と、本物の生きたトラの背に跨がったのだ、と大声で笑うではありませんか。写真どおり檻の中。ただし、トラの両側に飼育係が待ち構え、いざと言う場合に備えている。「安心して乗れるのよ。初めは私だってこわかったもん。跨がったら暖かくて気持ち良かった」そうです。凶星でした。中国人の商魂たくましく、ご本人は、正確には忘れたけれど「それほど高いおカネは取られなかったわよ」とか。

ところで、来年はウサギ(十二支は「卯」、動物では「兎」)です。どんな賀状が頂けるでしょうか。

年賀状の書き方や添え書きなどの話に話題を移しましょう。

冒頭の祝辞は、「謹賀新年」と「明けましておめでとうございます」が圧倒的に多く、「初春のお慶びを申し上げます」「新年のご祝辞を申し上げます」等も相当数ありました。やはり丁寧な表現は、男女の別なくいいですね。決まり文句でありながら、送り主の誠意が伝わってきます。

2字のみでは「迎春」が最多で意外に感じました。「賀春」「賀正」は、目上の方あてには望ましい祝辞ではない由ですが、友人間、同年代間であれば、簡潔で親密ささえ感じます。「頌春」「寿春」も少なからず。若い方がそう表現されると、「頌」「寿」を選んだ経緯をうかがってみたい気がしました。

「富貴大吉」「敬頌新禧」って4字熟語？ 賀状の初めにそう書いたこのお二人は、私より年長でもなく国語の先生や専門家でもない。毎年この同じ祝辞を記されるのか、年々新たに考案されるのか、来年の賀状が楽しみになりました。1枚1枚賀状をめくりながら、書き送られた方々に、これほど創意と敬意を感じ取ったのは久しぶりです。皆さんももう一度、受け取った賀状を見直してみる気持ちになりませんか？

近年はデジカメの普及で写真入りの賀状が急増しています。特にお子さんが二人、三人いらっしゃる方、赤ちゃんご誕生の若いご夫妻や祖父母になられた方が、ご家族お揃いであるいは数枚の写真を組み合わせてデザインする賀状が多い。そうすると、「謹賀新年」のスペースがなくなり、代わりに「寿」「寅」の文字をバックにするなど、賀状作りを楽しむ風情を感じます。シニア年代のご夫妻が旅先で撮った写真を入れる例もまた増加傾向。私はこれら写真入り賀状に好感を持ちます。現況報告そのものですから。

しかし、10種以上もの、いわば小粒の写真を入れ込んだ方が2人もおいででした。だれが何をしているか、ルーペでも不詳。多すぎてわかりにくいと、かえって失礼に当たるのでは？ せいぜい限度を7、8枚に抑え、できる限り、何の写真か、お子さんの名前・年齢を書き込む工夫をされてはいかが。そういう実例の方が多いのですから。

ところで、近況記載の賀状、絵入り賀状を拝見して嬉しい一方、年頭の祝辞と、1、2行の御定まりの挨拶文、住所・氏名を印刷しただけの賀状ですと、お元気なのか、今どうしているのか、何の情報もない。賀状は、年に一度の貴重な挨拶・交信の機会ですから、ぜひ一筆でいいから添え書きをして頂きたい。あて先の相手によって、1行か数行か、違いがあるのが自然です。そう難しいリクエストとは思いません。

もう一つ大事なこと。

写真入りの賀状の増加と平行し、英字で「おめでとう」を書こうと思うのか「happy new year」を使う方が増えています。業者に任せただけのか自分で書いたかはともかく、残念なことに、正確な英語が、私には1通も届きませんでした。

正しい英語は「A Happy New Year」です。最初の「A」だけは必ず大文字で、あとは、大文字、小文字どちらでもいいけれど。英語では、この言い方以外に「新年おめでとう」はあり得ません。頂いた賀状から選んで例示すると、「HAPPY NEW YEAR 2010」(同じのがあったから業者任せだったのでしょ)「BEST WISHES TO HAPPY NEW YEAR OF 2010」。何で余計な単語をわざ

わざ付けるのか。2010 は、端的に言えば日付の一部です。年頭に、A happy new year といえば、今年、2010 年に決まっているはずで、まったく不要な数字です。いつも正しい英語の表現を身に付けておくことは、仕事の上でも生活上でも大切なこと。業者任せにせず、自作、点検するのが本筋だと考えます。

ここで末尾の一言。頂いた賀状の整理と分類は、毎年 2 月に入っての大事な仕事にしています。正確に枚数をここで調べ、50 音順にまとめます。海外から延着のカードや寒中見舞い状なども合わせ、大事なアドレス・リストに各様のマークをしたうえで、賀状は年末まで取っておきます。翌年の賀状発信に際し、添え書きにも参考にする趣旨からです。

来年も楽しく綺麗な年賀状を交わしましょう。

( 1 月 22 日記。国際サブロー )